

水都ヴェネツィアと周辺地域の空間形成史に関する研究

樋渡, 彩 / HIWATASHI, Aya

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

432

(発行年 / Year)

2016-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第378号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2016-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013072>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	樋渡 彩
学位の種類	博士（工学）
学位記番号	第 600 号
学位授与の日付	2016 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 陣内 秀信 副査 教授 高村 雅彦 副査 教授 渡邊 眞理

水都ヴェネツィアと周辺地域の空間形成史に関する研究

1. 論文内容の要旨

本論文は、ヴェネツィアおよびその周辺地域を対象として、水と密接に結びついて形成された建築や都市、地域の在り方を従来とは異なる新たな視点から解き明かそうとするものである。その一つは、これまで系統的に取り組まれることの少なかったヴェネツィア本島の 19 世紀以後の歴史に関する研究で、この都市が近代化を受入れつつも、中世から形成されてきた水都としてのイメージを維持するのみか、舟運の強化や水辺の活用など新たな価値を加え、世界に誇る水都としての魅力をさらに高めていったプロセスを解明することを試みている。二つ目は、空間的、地理的に対象を広げるもので、資源の乏しいこの水都の営みを支えてきた周辺に広がる後背地としてのラグーナ（干潟）とテッラフェルマ（本土）を対象とする研究である。近代化のなかで忘れられ、開発のダメージも受けたラグーナについては、その自然環境、および随所に存在する歴史的空間を再発見、再評価し、ラグーナとの密接な結び付きによってヴェネツィア本島に水都独特の輝く文化が発達し得たことを検証している。一方、東方とのつながりにもっぱら光が当たるなかで、長らく研究者の関心がおよびにくかったテッラフェルマに関しては、河川およびその流域を通して、ヴェネツィアを支えてきた後背地、テッラフェルマの役割を新たな視点から考察し、相互の間に密接で有機的な関係がいかに形成されたかを解明している。

なお、本論文は 2005 年以降、留学や長期滞在を含め度重なる現地調査において多くの一次史料を含む膨大な文献史料の収集を行い、実測および聞き取り調査で得た成果もおおいに活用しながら、分析考察を進め、研究をとりまとめたものである。

本論文の本編は 4 章で構成される。

本編に先立つ序章では、まず本研究の目的、背景と問題の所在を提示し、各構成と方法を述べた。

第1章は、本論文の位置づけ、意味づけの役割をもつ。水都ヴェネツィアに関する建築史、都市史の研究動向を考察し、水の視点から都市を捉える研究は、1980年代から大きく展開したことを指摘した。この時代、アナール派の影響を受け、都市史研究において港町の研究に関心がもたれるようになった背景にも目を向けた。また、1966年のアックア・アルタ（冠水）をきっかけに、水都として再認識されるようになったことを論じた。そして、ラグーナの再生をめざす動きのなかで、ラグーナのテリトリー（地域）やパエザッジョ（風景）が重要視されるようになったことを指摘した。そこには、文化的景観という概念も盛り込まれ、さまざまな研究分野が総合的にラグーナを捉えはじめたことも検証した。ここでは、1980年以後に顕著になるヴェネツィアを水の視点から見直す動きと、その周辺に広がる地域が果たした役割を再評価する動きを詳細に論じたことにより、本論文全体のテーマ設定とその内容に関する意味づけをより鮮明にすることができた。

第2章では、共和国崩壊以後の19～20世紀初頭に焦点を当て、ヴェネツィアが都市構造を大きく変化させながらも、水都としてイメージを維持し、さらにそれを高めてきた過程を明らかにした。

まず、もともとの水都理解の基礎作業として、第1節では、1500年出版のヤコポ・デ・バルバリの鳥瞰図を用いて、水と結びついて発展したヴェネツィアの伝統的な空間構造を解説した。

第2節では、その共和国時代に作り上げられた都市構造が近代化の過程で大きく変化していく様を、舟運の視点から捉え直し、むしろ舟運を強化し、水の都市の特徴をいかしながら近代化を進めたことを明らかにした。

第3節では、19世紀にヴェネツィアで流行した水浴施設を取り上げた。リドの海水浴場が発展する以前からヴェネツィアでは富裕層の間で流行していた水浴として位置づけられる。

第4節では、共和国崩壊以後、従来、都市全体に広がっていた港の機能を南西地区へ集中させるインフラの構造変化が起こったことで、ヴェネツィアの水辺空間の役割・意味に大きな変化が生まれたことを指摘した。特にカナル・グランデ沿いでは、1930年代には、この運河の上にテーブルや椅子を並べたくつろぎ空間が出現するようになったことを明らかにした。現在の水都ヴェネツィアの典型的なイメージと結びつくこうした水上テラスが、新しい時期に誕生したという事実を解明した。

そして、第5節では、19世紀後半に港湾が整備された南西地区の劇的な変化を明らかにした。さらに1960年代の本土へ移転後、1990年代から産業遺産が大学やオフィスとして転用され、再び人の空間へと蘇るまでの一連の変化を描いた。単なる観光都市ではない文化都市、創造都市となっていることを結論として述べた。

このように本章では、近代化における水の都市の港湾機能の在り方の変化によって、本来、物流機能をもった水辺の空間がその役割を変え、新たな時代の要請を受けつつ、それまでになかった新しい用途、役割を獲得し、今日につながるヴェネツィアの水都としての魅力を高めてきた過程について解明した。

第3章では、特徴あるラグーナの空間を正面から捉え、それがヴェネツィアとの関係のなかでどのような役割を担ってきたのかを考察し、各節で次のようなことを明らかにした。

第1節では、ラグーナに人が住み始めてから行われてきた漁業、農業、狩猟などを挙げ、食料宝庫というラグーナの水環境の恵みと、祠に見られる精神面における水とのつながりを指摘した。

第2節では、アックア・アルタをテーマとして、常に変化し続けるラグーナの自然環境の対策の歴史を描き、絶え間ない努力の上に特異な環境を維持していることを指摘した。

そうした努力の上に成立しているラグーナの島々について第3節で取り上げ、ヴェネツィアにとって厄介な施設を受け入れる器でもあったことを論じた。近年では、大学や超高級ホテルに転用され、島を積極的に活用する動きに変わりつつある。従来の島の価値が再評価され、水都ヴェネツィアのイメージをつくり出すのに貢献していることを結論づけた。

第4節では、ヴェネツィアの観光化のイメージを決定的なものにしたリドの形成過程を明らかにした。第2章でヴェネツィア本島の東側が観光地化していく過程を描いたが、その続編が本節に当たる。リドの開発により、さらにダイナミックな水都ヴェネツィアに発展させることができたことを結論づけた。

そして第5節では、マルゲーラ港の建設とメストレなどの住宅開発について論じ、ヴェネツィア本島の住環境を守る大きな役割を果たしたことを指摘した。

第6節では、研究の手薄なヴァッレ・ダ・ペスカ（養魚場）に着目し、時代による位置の変遷を論じた。安定した食料供給をヴェネツィアにもたらすと同時に、狩猟場として娯楽の場でもあった。現在もなお、こうした豊かな水の自然環境が活用され続けていることを示した。こうした様々な視点からラグーナを描き、ヴェネツィアの発展にとって必要不可欠な空間であり続けてきたことを論証した。

第4章では、もう一つの後背地であるテッラフェルマを取り上げ、河川を軸にしながら、ヴェネツィアの都市建設と市民生活を支える地域構造が成り立っていたことを明らかにした。

第1節では、テッラフェルマの多様な地形と豊富な資源を広範囲に論じている。

第2節では、まずヴェネツィアと結びつきの深いシーレ川流域を取り上げ、トレヴィーゾを境にこの川に依存する生業が違っていたことを示した。また川を中心としたそれぞれの機能が、街や集落の構造にも影響を与えていることを論じた。

第3節では、ピアーヴェ川流域を取り上げ、木材輸送で形成された地域構造を明らかにした。伐採、製材、筏師による筏の輸送など集落による役割と、その筏の上に各地から集められた商品が載せられてヴェネツィアまで運ばれた事実を明らかにした。ピアーヴェ川を軸として、各郷土史研究をつなげて、広範囲の地域構造を読み解いた。これは都市史分野において、地域形成史を描き出すという新たな枠組みである。

最後にブレンタ川流域を取り上げ、ヴェネツィア共和国の外からの木材輸送に着目し、政治的支配権とは異なる、文化・経済システムを再構築した。またヴェネツィア―パドヴァ間の重要な舟運に焦点を当て、大規模な治水事業を行いつつも、舟運を維持し続けるために大きな役割を果たしたドーロについて論じた。

このように、河川や運河という水の空間軸から、ヴェネツィアとテッラフェルマの間に成り立っていた密接な関係を捉え直し、従来成り立っていた地域構造を描くことが可能となった。

結章では本編から得られた知見を整理し、二つの新たな領域、すなわち19世紀以後の歴史に関する研究と、後背地としてのラグーナとテッラフェルマを対象とする研究に関し、それぞれの研究成果を確認した。

このような二つのまだ未開拓の領域に光を当てることで、膨大な蓄積のあるヴェネツィアの都市史に関する研究の世界に一つの新たな可能性を提示することができたと考える。

2. 審査結果の要旨

本論文は、世界的な水都として知られるヴェネツィアを対象とし、その成立発展を島上の都市空間のみか、周辺地域（テリトリーオ）との繋がりにまで広げ、歴史的に考察するものである。膨大な研究蓄積のあるヴェネツィアを扱いながら、本論文は従来、研究が手薄でしかも今後にも可能性をもつ領域を的確にテーマとして設定し、文献史料と現地調査の両面からオリジナリティの高い研究の成果をあげた。その主な内容は以下のとおりである。

1. ヴェネツィアの都市史に関する研究動向の変遷（1960年代から今日に至る）を分析考察し、そのなかで新たな研究テーマとして、特に、独特の水環境をもつ干潟（ラグーナ）、資源のない都市の後背地として重要な本土（テッラフェルマ）への関心が1980年代以後に生まれてきた背景とその具体的な過程を論理的に示した。

2. 従来、共和国時代ばかりが注目されがちだったヴェネツィアの都市空間について、その崩壊後の近代化の時代に光を当て、港湾空間の西端への移動とともに、サン・マルコ広場を中心とする都心の水辺の土地利用が大きく変化したこと、その過程で水辺に文化・観

光の機能、施設が広く登場し、むしろこの時期に現在に繋がる水都ヴェネツィアのイメージが形成されたことを明らかにした。

3. イタリア都市研究において、1990年代以後、関心が高まってきた都市周辺に広がる地域（テリトリーオ）に注目する考え方をヴェネツィアに応用し、島の都市ヴェネツィアは、その周りに広がるラグーナ（干潟）及び現在のヴェネト地方にあたるテッラフェルマ（本土）からなるテリトリーオとの密接な結び付きを背景にその繁栄を実現できたことを、大きな視野のもとで具体的に検証した。

4. ラグーナの水環境の恵みが漁業、農業、狩猟により多彩な食料を供給して都市ヴェネツィアを支え、また優美な逃避の空間を与える一方、この水域が外敵からの防衛に役立ち、加えて疫病から守る検疫システム、隔離病院などの施設を配する場所としても活用される等、多義的な性格をもったことを明らかにした。近代の華やかなリゾート地として知られるリド島について、中世以来の歴史の重なりを示し、土地の変遷を明らかにしたのも大きな貢献である。

5. テッラフェルマについて、3つの重要な河川を取り上げ、筏流しによる木材の供給、水車による各種産業、舟運などの視点から、それぞれの川と流域が果たした多様な役割を検証し、ヴェネツィアと流域の町や村との密接な結び付きについて、その具体的な像を描き出した。川とその流域に着目して都市と地域の空間構造を読むモデルを提示した。

ヴェネツィアを対象とし、従来とは異なる視点からテリトリーオにまで広げて水都の成立の特徴を明らかにした本論文は、イタリア都市史研究、水都研究の分野に大きな貢献をなすものと言える。よって、本審査小委員会は全会一致をもって提出論文が博士（工学）の学位に値するという結論に達した。

（報告様式Ⅲ）